

日本統計学会会報

2016年10月30日

No 169

5. 特集記事

シリーズ「統計学の現状と今後」

国際交流雑感

谷口 正信（早稲田大学理工学研究所）

もう私の40年近く昔のことであるが、大阪大学の博士課程途中で広島大学助手として研究者の一歩を踏み出した。当時、広島大学の統計関係には、国際性をもった論文多産家が多く、海外からの研究者来訪も、相当の頻度であった。印象に残るのは、やはり、Australian National University (ANU) の Ted Hannan 教授が、広島に1週間ほど滞在された。当時の時系列解析の世界的大家であるので、これは千載一遇の機会と思ひ諸接待をさせていただいた。しかしながら、例えば宮島への観光船の中では、居眠りをされる有様で、その他、全般に「おもてなし」を好意的に思われていないと悟った。もちろん学問的な議論も投げかけて基本的には有意義な交流になった。その後、しばらくして、

私は Ted から ANU に招聘されることになった。当時の首都キャンベラは、人工的地方小都市の印象で田舎生まれの私にはいい雰囲気にも思われた。Ted は高等研究所の教授で、その Dr 職に、Daley。また経済学部には Peter Hall がいて、セミナーには Heyde や Speed など顔をだす大変立派な人的環境であった。当時、私はまだ駆け出しの研究者で、かたや Ted は大横綱であったので、彼が私を研究上使ったり、私にその他の貢献を求めることはなく、豪州に招聘して、遊ばせて貰ったというのが私の認識である。後年、私が外国研究者を招聘できる立場になってからは、招聘するからには、こういった貢献を求めるといった「無裁定 = no free lunch」の俗心が常に出て、横綱相

撲には、ほど遠い有様である。

その後、しばらくして、米国 Pittsburgh Univ. の Center for Multivariate Analysis への招聘をうけることになり、Krishnaiah, C.R.Rao 両教授のもとで研究をすることになった。インド系の研究者の中では、共同研究への貢献が求められ、ある面、分かり易い招聘論理で何編か多変量時系列で共同論文を Krishnaiah と書くことができた。私は多変量解析自体の専門家ではないが、当時 JMA の Editor であった Krishnaiah に、こういった解析で最先端の多変量解析の論文は何かと聞けば、即、教えてくれたので、短期間で時系列と多変量解析のハザマの研究ができ有意義であった。

大阪大学に転任後、ソウル国立大学の Sangyeol Lee 教授から招聘をうけ、その時、彼が言っていたのは、韓国でも、それまで、欧米からの研究者招聘に力を入れていたが、近隣のアジアの国々に立派な研究者が多数おり、しかも、国内旅費ぐらいで招聘できることに気付いたとのことであった。同感し、私もその後、Sangyeol や香港の N.H. Chan 教授、さらには台湾の研究者達もふくめ相互招聘する交流がつづき、関係者が皆グルメなので、東京、ソウル、香港、台湾の“gourmet-square relationship”と名付けている。もちろん、グルメだけでなく、研究も、欧米で Ph-D 取得されたり、そこで教授職を経験された人達があり、すこぶる high-standard なので、近年は、アジアの国々間での研究交流の重要性が大きく増してきたと感じている。

ISI 北京大会でブリュッセル自由大学 (ULB) の Marc Hallin 教授と知り合い、そこで ULB の滞在教授として招聘された。1990年半ばのブリュッセルは中世の雰囲気漂う美しい街で、Marc との共同研究とグルメが楽しめた。その後、私が早稲田大学に移ってからは、ULB と早稲田の二国間共同研究 (JSPS) によって、双方の研究グループの早稲田とブリュッセルでの交流機会を得て、その共同研究が終わった後も、個人的交流関係は私以外のメンバーも続けている。ということでブリュッセルを訪れる機会が多いが、回を重ねるご

とに人種混合が増している印象があり、また街の汚れを意識させられ、さらには治安も危うさを感じるのは私だけであろうか？

早稲田大学において、私は、この10年、基盤 (A) による研究推進を進めており、多数の海外からの研究者を招聘した。多くは期間が1週間程度なので、全くの儀礼的なものになったりしがちであるが、部分的には、周辺の研究者も巻き込んだ形での発展的国際交流になって来つつある。最近の例では、ドイツ、

Bochum の Holger Dette 教授が、拙所の PD 2 名を気に入って Bochum に招聘してくださった。その後も、若手研究者の活躍できる機会は世界諸所に広がりつつある。

私の最近印象に残ったことでは、Queen Mary Univ の Liudas Giraitis 教授よりロンドンに招聘されたとき彼のホスピタリティーで、連日、観劇、コンサート、グルメ、観光接待を受ける中、実質5日間で共同論文のメドを立てた。これは、ひとえに彼の有能さによるものであるが、あまりに High efficient な招聘であるので疲れるものであった。

昨今、政府の政策として、インバウンドがとやかく言われており、これは来日観光客を増やし、彼らに消費をさせる点に力が置かれていると思われる。統計学の研究者のインバウンドを考えるなら、単に来日人数を増やすのではなく、それによって相互の研究進展が増大することが最も重要と思われる。また研究者交流においてはインバウンドとアウトバウンドは双対であり、片方だけが進むのは歪んだものである。したがって以下、すべてインバウンドとアウトバウンドを入れ替えても読めるべきである。自分の経験を述べるなら

- (i) 自国側への貢献にこだわらない「横綱相撲のインバウンド」
- (ii) give & take のはっきりした共同研究遂行のためのインバウンド
- (iii) 何等かの資金を元にした、2国、他国間のグループ研究交流
- (iv) アジアの国々の研究者達と相互交流関係

(ユーロ圏のそのような)

(v) 超短期間に何事でもやる「High efficient なインバウンド」

ぐらいであろうか、,,, (ii), (iii), (iv) が標準的と思われるが、俗世間に生きていると諸事、Profit, return に目線がたって (i) のようなインバウンドはなかなかできないものであるが、逆に長い人生の中で印象に残るものであり、最近、外国の有名大学で大変優秀な若手研究者に会うと、(i) の招聘をしたくなることもある。また近年、アジアのやり手研究者と会話していると、博学さ、頭のキレは、欧米の大家と呼ばれる人達のレベルと全く遜色なく、シンガポールぐらいまでを含めたアジア研究交流圏の構築 (iv) が必須であろう。

最近、海外からの観光客が日本人が知らない地方都市で新しいホットスポットを見出して、逆に、我々の興味をひいたり、盆栽美術館に外人客が群がっていると聞いて、学問の交流も、同じではないかと思われる。つまり、我々が日常使っている

手法が、外国人研究者には目新しく見えて、その指摘が双方へハイブリッドな高みを生むのではと思われる。単に利得目線では、研究インバウンドも長続きせず交流による独創性は育たないのではないかと思われる。

老齡の私は陶磁器が好きであり、伊万里（有田）焼は好きなものの一つである。伊万里焼も、もとは、中国大陸、朝鮮半島の作陶の流れの真似で、朝鮮陶工が有田で始めた。しかしその後、我が国独特の sophistication を発展させていく。また伊万里港から伊万里の名前で欧州に渡り、マイセンやロイヤルコペンハーゲンなどにも影響を与えた。これら欧州の磁器も、その後、独自の雰囲気を出していく。研究インバウンドも、当初は外国の真似でも、インバウンド、アウトバウンドの中で独自の進化、sophistication を得て、それが双方や他所へのハイブリッドな影響を与えていくことが肝要かと思われる。